

日本仏教思想史上の『源氏物語』

藤村 安芸子*

はじめに

『源氏物語』が著された時代において、人々は、仏教をどのような教えとして受けとめていたのだろうか。このような問題について考える手がかりとして、源為憲が永観2年(984年)に冷泉天皇第二皇女尊子内親王に献上した『三宝絵』をあげることができる。仏の道を志してまもない若き内親王のために記された『三宝絵』からは、仏教の基本的な教えとともに、当時の人々の傍らにあった仏教の、生き生きとした姿を読みとることができる。

『三宝絵』は、上中下の三巻からなっており、その冒頭には、三巻全体の序がおかれている。上巻には釈迦の本生譚が、中巻には日本における靈驗譚が、下巻には当時行われていた法会や仏教行事の様子が記されている。上巻では、過去世の釈迦の行いを語ることによって、仏について明らかにし、中巻では、仏の教えがもたらした不思議な出来事を語ることによって、日本に法が広まりゆく様子を描き出し、下巻では、年中行事として行われていた仏教儀礼を語ることによって、僧について明らかにしている。各巻の冒頭には巻の趣旨を述べた部分が、各巻の末尾には仏法僧をそれぞれほめたたえた部分が付されている。

源為憲は、様々な経典や説話集から多くの文を引用しつつ、自らの言葉で、仏・法・僧という三宝について説き明かした。『三宝絵』の特徴は、仏教について説明するために、明文化されている

仏教思想だけではなく、人々が参加する仏教行事にも注目している点にある。私たちは『三宝絵』を読むことによって、当時受け入れられていた仏の教えについて知ることができると同時に、人々がごく当たり前のものとして受けとめていた、仏教にかかわる日々の行いについても、理解を深めることができる。本稿では、『源氏物語』の背景にある仏教について確認するために『三宝絵』を参照することにしたい。

源為憲は『三宝絵』序の冒頭において、「サトリフカク解 深イマ慈イマビイマ広ク伊坐ス」¹ 仏の教えとして、「世ハ皆堅またからざク不全ル事、水ノ沫、庭水、外景ノ如シ。汝等悉ニハタツミク正二疾カゲロフ厭トクヒ離ルハ心ヲ可成」という言葉を紹介している。この世は、はかなく不完全であり、頼りにならないものであるから、この世を厭い離れる心をおこすべきであると、仏は勧めた。「解」深い仏は、この世の本質が無常であると見抜くことができた。けれども通常人々は、自らの身や他者の身、そして他者と結ぶ関係がはかないものであるということに気づかず、それらをよりどころとして生きてしまう。だからこそ人々は、自らの死を思うとき、あるいは他者の死と出会うとき、悩み苦しむ。「慈ビ広」い仏は、人々がそのような苦しみ続けることが耐えがたかったからこそ、人々にそうした苦しみから抜け出す方法を教えた。それが、悟りを得るために、出家し修行を積み重ねるといふ道であった。仏教は、人間の抱える苦しみについて考察し、そこからの脱出方法を具体的に指し示すものとして受けとめられていたと言えよう。

*駿河台大学教授

『源氏物語』もまた、人間の抱える苦しみや悲しみを徹底的に見つめた作品であった。母の死と祖母の死から語りおこされた光源氏の生涯は、その後も数多くの別れに隈取られている。『源氏物語』は、一方で光源氏の栄華を語るものであるが、同時に、その栄華が多く苦しみや悲しみとともに実現したものであることを告げている。苦しみを経験するのは、光源氏ばかりではない。光源氏とかかわった女君たちもまた、それぞれに悩みを抱えている。苦悩を深める登場人物たちは、何らかの形で、仏の教えと向き合うことになる。仏の教えが、彼ら彼女らの傍らにあって、自らの苦を引き受ける一つの方法を示していたとすれば、その教えを肯定するのであれ、否定するのであれ、向き合わざるを得ないと言えよう。だからこそ『源氏物語』は、仏教と深く切り結ぶことになり、仏教に対する独自の批判をなし得ると同時に、仏教の新しい可能性を見いだすことができたのではないだろうか。『源氏物語』は、『源氏物語』が書かれた時代の仏教思想、たとえば天台教学や浄土教などの影響を受けてはいるが、『源氏物語』が提起する問題は、むしろ仏教の根幹に関わるものであると思われる。そこで本稿では、仏教思想について、仏教の原点にまでさかのぼり確認した上で、仏教が日本においてどのような形で受け入れられたのかを辿っていき、『源氏物語』が仏教に対して投げかけた問題について、考えていくことにしたい。

1 仏の教え

仏の教えの源は、紀元前6世紀または5世紀に、釈迦が説いた教えにある。その基本的な内容としては、四諦八正道と四法印があげられる。四諦とは四つの真理という意味であり、具体的には、苦諦・集諦・滅諦・道諦の四つを指す。その内容をまとめれば、この世のすべては苦しみであり、その原因は決して満たされることのない欲望（煩惱）である。原因である煩惱を滅却すれば、苦し

みもなくなる。煩惱を滅却するためには、八つの正しい修行方法、すなわち八正道に拠らなければならない、というものである。四法印とは、諸行無常・諸法無我・一切皆苦・涅槃寂静の四つを指している。すべては移り変わり、存在は関係の中で仮にそのようなものとして存在しているに過ぎず、永遠不滅の実体ではない。しかし、人はそれに気づかず、永遠のものと思い、執着する。その結果、手に入れられないものを得ようとして苦しみが生じる。この苦しみを取り除くことで、静かな安らぎの境地に達することができる。

仏教がめざしたのは、真理に目覚め、煩惱を滅し、苦から脱却することであった。このように、もともと仏教は、自分が修行し、その結果として自分が悟りを得ることをめざす、すなわち自業自得を旨とするものであった。それに対して、紀元前後におこった大乘仏教が強調したのが、回向である。回向とは、自己の善行の結果である功德を他にめぐらし向けることである。しかし、このような変化は、仏教が異なる教えへと変貌したことを意味するのではない。元来あった「諸法無我」の教えがより徹底されることによって、新たに生み出されたと言える。すべての存在が関係の中で成立するのであれば、自分一人が成仏することは、論理的に不可能となる。その結果、切り離された個としての自己が成仏することではなく、相互の関わりの中でともに成仏することがめざされたのである。

また、他者を救おうとする慈悲の心の原点は、教えを広めた釈迦の姿の中に見いだされている。真理に目覚めた釈迦が、その真理を人々に伝えようとしたのは、人々が苦しみ続けることが耐えがたかったからである。「解深慈比広ク伊坐ス」仏、という『三宝絵』の言葉は、このような釈迦像を端的に物語っている。

仏の教え、すなわち法を他者に与えるということは、釈迦亡き後を生きる人々にとっても、善き行いとして位置づけられていた。そのことを示す

文を、『三宝絵』下巻から引用したい。下巻第十話では、志賀伝法会について説明しているのだが、そこで源為憲は大智度論より「仏トキ給。諸ノ施ノ中ニ法施第一也。ナニヲモテノユヘニ。財施ハ限アリ、法施ハカギリナシ。財ハタマ施スル人ノミ福ヲウ。法施ハ、施スル人モウクル人モ、トモニウ」という文を引用している。そもそも施は、大乘仏教において重視されている利他行の一つである。他者を救うために、わが身や財や法を施すことは、善行として位置づけられている。その中で法を施すことは、相手にもよい結果をもたらすことができる行いとされている。それは、法を与えられた側は、与えられた法をよりどころとして、自ら仏と成ることをめざすことができるからである。そのため、法を与え・与えられる関係を、いくえにも積み重ねていくことによって、ともに成仏することがめざされていくことになる。

では、このような大乘仏教の教えは、日本においてどのように受けとめられたのだろうか。この問題について確認するために、再び『三宝絵』を参照することにしよう。『三宝絵』は、中巻において日本の仏教史を語っている。その末尾において源為憲は「四百歳ヨリこのかた以来、幾ノ衆生いくばく力知因、くわをさとりくをはなれたのしみをえし悟果、離苦、得楽」と仏教伝来以降の四百年の歴史をまとめている。仏教とは、人々に因果を教えることによって、苦を離れ樂を得ることを可能にするものであった。この結論に先立ち、源為憲は、様々な靈驗譚を十八並べ上げている。それらはいずれも、善因樂果、あるいは悪因苦果を示すものであり、その多くは『日本靈異記』より引用されている。『日本靈異記』は、奈良時代末期から平安時代初期にかけて編纂された仏教説話集である。その著者景戒がこの書をあらわしたのは、「善惡さまの状を呈すにあらずは、何を以てか、あらは曲執ごくしふを直して是非を定めむ。因果の報を示すにあらずは、何に由りてか、悪心を改めて善道を修めむ」²と考えたからであった。因果応報を具体的に示し、何が善で何が悪かを明らかにすることによって、

仏の道へと人々を誘うことが、景戒の目的であった。日本において仏教は、人々に因果応報を教えるものとして定着したと言えよう。人々は、因果応報を知ることによって、自業自得の観念を身につけていったのである。

一方で、自己の善行の結果を他者にめぐらす回向もまた、行われていた。その例としてあげられるのが追善供養である。『日本靈異記』には、高橋連東人が、亡き母のために法華経を写し法会を行うという話が、中巻第十五に収められており、この話は、『三宝絵』にも載せられている。これは、生者が、経を写し法会を行うという善行をなすことによって、その結果である功德を死者にめぐらし向け、死者が救われることを願うという営みである。また、他者との関わりの中から共同成仏をめざした例としては、源為憲の志があげられる。為憲は『三宝絵』を尊子内親王に献上するにあたり、「此ノ志ヲ以テ又後ノ世ニモ被引導奉ラム事」を願っていた。尊子内親王に『三宝絵』を献上することによって、後の世で尊子内親王に導かれることを願う。ここでは、法を与え・与えられることによって、ともに成仏することがめざされているのである。

仏教は、人々に新たな望ましい生き方を教えた。それは、自らが苦しみを経験したとき、それをどのように引き受ければよいかを示してくれるものであった。『源氏物語』に登場する人々が、何らかの生き方を選びとろうとするとき、その選択肢の一つとして、仏の道を志すということが想定されていたと言えよう。では、『源氏物語』の登場人物たちは、仏の教えを知った上で、どのような生き方を選んでいったのだろうか。ここでは、とくに光源氏と深い関わりをもった女君たちの生き方に注目し、考えていくことにしたい。

2 『源氏物語』女君たちの道心一空蟬・藤壺・六条御息所

光源氏との関わりを通じて苦悩を深めるという

経験をした後に、出家を志した女君としては、空蟬・藤壺・六条御息所・朧月夜・女三の宮・紫の上があげられる。この中で、空蟬・藤壺・六条御息所については、出家を決意する前に、自らの「宿世」を思うという描写が見られる。光源氏との関係の中で、自己を「うき身」と捉え返し、「うき宿世」を自覚する。そうしたものの思いをへた上で、彼女たちは出離をとげる。

このような自己理解は、因果応報の思想にもとづいてなされるものである。「宿世」とは前世のことであり、転じて、前世につくった業を意味している。「宿世」は、現在自分が陥っている苦境が、自らの意思や願望とは無関係に生じたものであるときに意識される。現世の自分は、悪しき行いをなしていないのに、なぜこれほどまで苦しまなければならないのか。そう問うたとき、現世の苦の原因が、自己の前世の行い（悪行）に見いだされることになる。自分がかつて、悪しきことをなした。そうした「うき宿世」の結果として、現在「うき身」を味わっているのだと理解されるのである。「宿世」を思うことは、不如意な現実を、他ならぬ自分もたらしたものととして、主体的に引き受けるということをもたらしている。

「うき宿世」を自覚したゆえに、出家する。その理由は、仏の教えにもとづいて説明すれば、現在まで続く悪因苦果の連なりを、今ここで断ち切ろうとするから、となる。今ここで出家し、善行をなすことによって、楽を得ようとする。三人の女君の生き方は、基本的に、仏の教えに添う形で造型されていると言えよう。

その上で物語の展開に応じて、三人の女君それぞれが、出家する固有の理由を担っている。六条御息所であれば、伊勢の斎宮という「罪深き所」(②310)³で過ごしたことが、大きな影を落としている。空蟬と藤壺の場合は、眼前にある不如意な関係から逃れたいという強い意志が働いている。不如意な男女関係を通して、自らを「うき身」と思い「うき宿世」を意識するとき、思い描かれる

「うき宿世」とは、単純に前世での自己の悪しき行いというばかりではなく、前世で結ばれた相手とののっぴきならない関係をも含むものであろう。前世でも自分は、その相手と何らかの苦しくつらく悪しき関係を結び、その結果として、現世でもこのような苦しみを受けている。そう理解しているからこそ、出家という手段によって、現世での相手との関わりを断つと同時に、現世まで続いた苦しい関係の連鎖を断ち切ろうとするのである。

では、彼女たちは出家した結果、楽を得ることができたのだろうか。この問いに対して、物語は否と答えている。藤壺と六条御息所については、出家したにもかかわらず、死後もなお苦しむ様子が描き出されている。それはなぜだろうか。

その理由は、『源氏物語』が見いだした人間観にあるのではないかと思われる。葵巻において六条御息所が、光源氏に対する思いに悩み、もう光源氏を思うまいと決意したとき、語り手は「思ふもものを」なり(②37)と評している。思うまいと思うことが、実は思っていることなのであるという言葉は、六条御息所のありようを鋭く言いとったものであろう。六条御息所は、思うまいとするからこそ、よりその思いを強めていく。そうだとすれば、他者を思うことを執着として否定する仏の教えは、思いを強める役割を果たすことになるのではないだろうか。

仏の教えに従い、自らの煩悩を否定しようとすることによって、より一層、仏の教えから逸脱してしまう。この問題を明確な形で背負うことになるのが、若菜上巻以降の光源氏である。光源氏は、出家することを願うも、紫の上に対する思いゆえに出家することができない。御法巻の冒頭では、光源氏の心のゆれ動きがつぶさに記されている。光源氏は「一たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみんとは思しおきてず」(④494)とあるように、強い決意を抱いている。しかし、病あつき紫の上の姿を見ると「今はと行き離れんきざみには棄てがたく、なかなか山水の住

み処濁りぬべく、思しとどこほる」(④494) となってしまう。光源氏は、出家した暁には、俗世に対する執着を一切もたないようにしたいと考えている。しかし、そう思い紫の上を見るからこそ、一層離れがたい思いがつのってしまう。その結果、たとえ出家したとしても、心が乱れたままとなることが予想され、出家できなくなってしまうのである。ここでは、紫の上に対する思いを断ち切ろうとするからこそ、一層その思いにとらわれていく様子が描き出されている。仏の教えに従おうとする強い思いこそが、出家への道を閉ざしていく。これは、仏教に対する鋭い批判と言えるだろう。

ではいったい、人はどのようにして自らが抱える苦しみを引き受けていけばよいのだろうか。六条御息所や藤壺は、出家したものの来世で苦しんでいる。このままでは、光源氏との関わりの中で苦悩した女君たちは、皆、救われないうまままよい続けることになる。この問題を引き受け、女君たちの新たな生き方を模索したのが、若菜上巻以降であった。

3 『源氏物語』女君たちの道心－朧月夜・女三の宮・紫の上

先述したように、空蝉・藤壺・六条御息所の三人は、ひとしく自らの「宿世」を思い出離をとげていた。それに対して、若菜上巻以降で出家を志す朧月夜・女三の宮・紫の上には、出家の前に「うき宿世」を自ら思うという記述が見られない。彼女たちに共通しているのは、結論を先取りすれば、他者に苦を与える存在として、自己を意識するという点である。これは、「宿世」を自覚する場合とは異なった、自己の捉え方である。「宿世」を意識するとは、現世の苦の原因を前世の自己の悪しき行いに見いだすということである。このとき、前世の自己は苦を与える側に立ち、現世の自己は苦を与えられる側に立っている。前世－現世－来世とつながる自己を意識することによって、現世の苦を引き受けるということが行われる

場合、現世の自己は、あくまでも苦を与えられる存在として意識されることになる。

それに対して、朧月夜と女三の宮は、現世の苦の原因を、現世の自己の悪しき行いに見いだしている。朧月夜は、自分が光源氏と浮き名を流したから、自分も光源氏も、そして朱雀院も苦しんだのだと捉えている。女三の宮は、柏木と契りを結ぶことになった原因として、自分が光源氏に注意されていたにもかかわらず、柏木に見られてしまったということ意識しており、その結果、父朱雀院を悩ませていると捉えている。自分もたしかに苦しいが、自分の身近にいる存在もまた、苦しんでいる。その原因は、他ならぬ自分にある。そうした意識をもち、二人は出離をとげるのである。朧月夜の出家の理由は、明確には語られていず、女三の宮の出家は、柏木との子、薫の出産を契機として女三の宮自身が決めたのか、あるいは物の怪のはたらきによるものなのか、どちらともとれる描写となっている。けれども、二人の出家には、その前に他者の苦しみを思うという場面が入ることによって、他者の救済を願う思いが含まれていることが暗示されている。朧月夜が、出家後に光源氏より「避りがたき御回向の中にはまづこそはとあはれになむ」(④262) という文をもらったときに、「回向には、あまねきかどにても、いかがは」(④263) と切り返せたのも、自らの出家が、光源氏だけではなく、自らが苦しみを与えた朱雀院を含めた、一切衆生の救済を願うものであることが意識されていたからであろう。同時に、回向という営みを通して、朧月夜は光源氏を思い続けることが可能になった。朧月夜は、光源氏に対する思いを執着として否定することなく、仏教によって、自らの思いをすくいとってもらったと言えよう。宿世を自覚し、他者と切り離された個としての自己が救済されることを願うのとは異なった道のりが、ここでは示されている⁴。

紫の上もまた、他者に苦を与える存在として自己を捉え返しているが、さらに紫の上の場合は、

他者に与える苦しみを意識するからこそ出家することができない、という新たな事態に直面する。次に、そのいきさつを辿っていくことにしたい⁵。

紫の上が苦悩を深めていくのは、女三の宮の降嫁後であるが、その思いが詳細に語られるのが、病に倒れる前である。女樂が催された翌日の夜、女三の宮のもとへ行く光源氏を見送った紫の上は、次のように考える。

かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢけなくもあるかな」(④212)

紫の上は自らの宿世を「人よりことなる宿世」と捉えている。この言葉は、光源氏の言葉によって導かれている。女樂の後、光源氏は紫の上について「人にすぐれたりける宿世」(④207)と評していた。紫の上は、光源氏の言葉をそのまま受けとめ、自らの宿世はよきものであったと捉えている。その結果紫の上は、「もの思ひ」を抱きながら生き続けているという現世の苦しみの原因を、前世に見いだすことができない。物語は、紫の上の生を通して、宿世を自覚するのとは異なる方法で自らの苦しみを引き受ける道を、描き出そうとしている。

この場面において、紫の上の「もの思ひ」は、光源氏と女三の宮の存在によって生み出されている。光源氏の傍らには、常に他の女君が存在し続け、それは、自分が生きている限り続くということが、女三の宮の存在によって確たるものとなってしまったからである。

では、紫の上は、自らが抱える「もの思ひ」をどのように引き受けていったのだろうか。まず、

光源氏に対する思いについて見ていこう。先ほど引用したように、自らを「もの思ひ離れぬ身」と捉え返した紫の上は、病に倒れる。病状が回復しないまま日が過ぎ、紫の上は六条院から二条院へと移ることになる。二条院でいったん紫の上は、死を迎えたように見えたが、息を吹き返す。その後、紫の上は、深く嘆く光源氏を見て、このまま自分が死んでしまったとしたら、思いやりのないことだと考え、生きようという意欲を持つことになる。

この場面においては、紫の上にとって、深く嘆く光源氏が生のよりどころとなっている。病に倒れる前、紫の上は、よりどころとなる男とは、いろいろあったとしても最終的には、ただ一人の女を変わらず愛し続ける男であると考えていた。男の愛の深さは、その愛がどれだけ続くのか、そして、ただ一人に向けられているのか、ということによって測られていたと言えよう。それに対して、ここでは、男の愛の深さが、嘆きの深さによって測られている。紫の上は、光源氏の情愛を、以前とは異なるかたちで実感することができた。だからこそ紫の上は、「もの思ひ」から脱することができたのである。同時に紫の上は、悲しみに暮れる光源氏を見ることによって、自分が光源氏を苦しめていると思うようになる。これまでは、自分が光源氏によって苦しめられていると考えてきたが、逆に、自分もまた光源氏を苦しめているのだという意識が芽生えた。このことは、後に大きな意味をもってくる。

では、次に女三の宮に対する思いについて見ていくことにしよう。死の淵からよみがえった紫の上は、女三の宮に対しても、それまでとは異なった思いを抱いている。紫の上は、六条院に女三の宮を見舞った後、二条院に戻った光源氏に対して「心地はよろしくなりてはべるを、かの宮のなやましげにおはすらむに、とく渡りたまひにしこそいとほしけれ」(④256)と告げている。紫の上は、体調のすぐれない女三の宮のもとを訪れたにもか

かわらず、すぐに二条院へ帰ってくるのは、かわいそうなことであると、女三の宮の寂しさを慮り、さらに光源氏に対して、先に六条院に帰ることを勧めている。女楽の後、光源氏が女三の宮のもとをおとなう姿を見つめ、苦悩を深めていった姿とは、対照的である。なぜ紫の上は、女三の宮を慮ることができたのだろうか。それは、このときの女三の宮と同じ思いを、かつて紫の上が抱いたことがあったからだと思われる。

光源氏が紫の上のもとを訪れる前に、女三の宮は、二条院に帰ろうとする光源氏をいったんひきとめている。光源氏は、六条院に二・三日泊まり、その間も頻繁に紫の上に文を送っていた。そこには、紫の上の容態を気遣う言葉と同時に、いつ帰るといった内容も記されていたであろう。そうして夜が近付き光源氏は帰ろうとするが、女三の宮は歌をよみ、一人残される寂しさを訴える。そのため光源氏は、迷ったものの、もう一晚六条院に泊まることにする。その結果、柏木からの文を見つけ、深い悩みを抱えたまま二条院を訪れる。この出来事を紫の上から見れば、おそらく、今夜帰るという知らせを受けていたにもかかわらず、光源氏が帰ってこなかったということになる。以前であれば、これは、光源氏の情愛の衰えを嘆ききかけとなったかもしれない。しかし、ここでは、紫の上は、女三の宮の気持ちを代弁している。紫の上が女三の宮に共感できた背景には、かつての紫の上自身のふるまいが存在している。

紅葉賀巻で、紫の上は、夜になると他の女君のもとへ行こうとする光源氏をひきとめている。そのため、光源氏は、他の女君との約束を反故にし、紫の上のもとにとどまる。そうしたことがしばしばあったという。今夜帰るといった光源氏が現れなかったとき、その理由が、女三の宮がひきとめたからだ、ということは想像しやすいだろう。紫の上はこのとき、かつて自分が光源氏をひきとめたため、寂しさを味わった女君と同じ立場に立っている。同時に、女三の宮は、かつての自分でも

ある。紫の上にとって女三の宮は、光源氏の寵愛を争う相手ではなく、同じように光源氏の訪れを恋しく待つ存在として捉え返されていると言える。そう思うことによって、紫の上は、「もの思ひ」から脱することができたのである。

最終的に紫の上は、光源氏に対する思いを否定することなく、自らの「もの思ひ」から解き放たれている。光源氏の情愛の深さを確信したからこそ、光源氏のために生きようとし、光源氏の不在を嘆く思いがあるからこそ、女三の宮に対する共感を深めていく。同時に、その過程において、自己は、他者に苦を与える存在として捉え返されていく。光源氏を嘆かせ、光源氏を恋う他の女君を嘆かせる存在として、自己が意識されるのである。その結果、自己を、一方的に苦を背負わされる存在と捉える思考から、逃れることが可能になる。

では、このように自らの「もの思ひ」と向き合った紫の上は、どのような最期を迎えるのだろうか。その後紫の上は、再び苦悩を味わうことになる。光源氏を思うがゆえに、出家することができないという事態に直面するのである。

紫の上は一貫して出家を願っているが、光源氏はそれを認めない。光源氏は、自身もまた出家を志しているが、僧となった暁には、紫の上とも離れ修行に専念することをめざしている。しかし、病のあつい紫の上と離れることは耐えがたい。その結果、自らも出家できず、紫の上の出家も認めることができない。一方、紫の上は、光源氏の許しなく出家することは、本意に反すると思い、出家することができない。なぜ紫の上は、一人で勝手に出家するという道を選ばないのだろうか。

経典には、人の出家を妨げると悪報を受けるということが記されている⁶。光源氏は、紫の上に対する執着のために出家できないので、紫の上は、光源氏の出家を妨げているという意味で、罪を犯している。さらに自分が出家して光源氏を深く嘆かせることになれば、光源氏は、やみがたい愛執の思いにとらわれ、仏道修行からより一層隔たっ

てしまうことになる。光源氏がよりよき来世を迎えることを願うならば、出家することができないという事態が生じてしまうのである。

『源氏物語』には、この時代において、他者に煩惱を抱かせることを「罪」と捉える発想があったことを示す描写が登場している。光源氏は、女三の宮に対して「後の世の御道の妨げならむも、罪いと恐ろしからむ」(④270)と告げている。女三の宮の密通を父朱雀院が知り、心を悩ませ、その結果成仏できなかつたとすれば、その「罪」は女三の宮にある。

もっとも物語は、他者に煩惱を抱かせることを「罪」と捉える発想を、共感をもってそのまま認定しているわけではない。夕霧巻では、夕霧に懸想され、母を失い、苦悩を深めていく落葉の宮をめぐる、様々な人物が「罪」という言葉を投げかける様子が描き出されている。その結果、落葉の宮にとっては、夕霧と結ばれることも、夕霧を拒絶し出家することも「罪」となるという状況が出現する。「罪」という言葉が、苦悩する女君をより苦しめてしまう。そうした問題意識が物語には流れている。

けれども、その一方で紫の上の生を描くにあたっては、物語は、紫の上に自ら「罪軽かるまじきにや」(④495)と意識させた。他者に煩惱を抱かせることを「罪」と捉える。そう紫の上が考える背景には、自分が死の淵から蘇ったときに見た、光源氏の姿が存在する。深く嘆く光源氏を見ることによって、紫の上は、自分が光源氏を苦しめる存在であると痛感した。紫の上にとって、他者に苦を与える存在として自己を捉え返すことは、仏の教えを耳にすることによってもたらされたのではない。自らの経験にもとづいた、痛切な思いとして存在している。その思いゆえに、いったんは生きようとした紫の上であったが、いよいよ自らの死期が近付いてきたとき、その思いは行き場を失ってしまう。そのとき、その思いを引き受けてくれる役割を果たしたのが、仏教であった。

紫の上は、自分の死後、光源氏が深く嘆くことを案じていた。その思いは、御法巻の冒頭においても「年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける」(④493)という形で描き出されている。その後、出家したいという紫の上の願いを光源氏が認めないということが記され、改めて紫の上の思いとして「わが御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり」(④495)という不安が語られる。この場面において「わが御身をも」という言葉が登場していることから分かるように、紫の上がまず考えていたのは、光源氏の「罪」であった。光源氏は、自分の出家を妨げ、自分に対する執着ゆえに出家できず、さらに自分が死んだ暁には深い嘆きにとらわれることが、予想される。自らの「罪」を思う前提には、自分のために出家することができない光源氏、そして、自分の死後も心乱れ仏道修行からより隔たってしまう光源氏を案じる思いがある。これらの思いと、御法巻冒頭に記された思いは、連続しており、最初の思いが、光源氏との出家をめぐるやりとりを通して、仏教の文脈で捉え返されるという展開になっている。その結果到達したのが、自己の「罪」を思うということであった。光源氏を案じる思いが新たな自己意識を生み出し、その自己意識にもとづいて、次に何をなすべきかを考えることができる。他者に煩惱を抱かせることを自ら「罪」と捉えることによって、死を前にしてなお一歩足を踏み出すことができる、そうした可能性を、物語は見いだしていたと言えよう。

紫の上は、自らの「罪」を思い、次になすべきことを考えた。その結果行われたのが、光源氏を救うために極楽の曼荼羅を残すことと、自らの「罪」を消すために法華経千部を供養することであった。

極楽の曼荼羅が物語上に登場するのは、紫の上が亡くなった後のことである。夕霧から紫の上の一周忌について尋ねられた光源氏は、紫の上が作

成した極楽の曼荼羅を供養すると告げる。極楽の曼荼羅を作成することによって、紫の上は善き行いをなしたことになり、また、その極楽の曼荼羅を光源氏が供養することによって、光源氏も善き行いをなすことができる。紫の上は、光源氏のよりよき来世を願い、光源氏が供養できるよう、極楽の曼荼羅を残したと考えられよう。

一方、法華経については、紫の上は自分が生きている間に供養することにし、そのために法会を行った。それは、自らの「罪」を消すために行われたものであるが、同時に、親しき人々へ最後の挨拶を行う場ともなっている。この法会には、花散里や明石の君も参加している。紫の上は、光源氏をめぐり挑み合う関係にあった女君たちと、最後にともに過ごすことを選んでいく。その背景には、女三の宮との関わりを通して育まれた、他の女君に対する共感があったと考えられよう。女三の宮の寂しさを思いえた紫の上は、光源氏を待つ他の女君たちの寂しさにも気づきえたであろう。そのことが、光源氏にただ一人愛されることを願う思いから紫の上を解き放つと同時に、他の女君たちを、自分がこれまで苦を与えてきた存在として捉え返すことにもつながっていく。法会に彼女たちを招くというふるまいの中には、彼女たちのよりよき来世を願う思いもまた含まれていよう。

けれども、そのように他の女君に対する共感を深めたからこそ、彼女たちとの別れが、つらく苦しいものとして胸に迫りくることになる。この法会で、自分がただ独り死にゆくことを意識し、深い孤独感を抱いた紫の上は、花散里に歌を贈る。

さすがに情をかはしたまふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなりなむを思いつづくる、いみじうあはれなり。

事はてて、おのがじし帰りたまひなんとするも、遠き別れめきて惜しまる。花散里の御方に、

絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々

にと結ぶ中の契りを
御返り、

結びおく契りは絶えじおほかたの残りす
くなきみのりなりとも (④498-499)

法を贈り・贈られるという形で結ばれる縁の存在が、死期の近い紫の上に、一つの希望を与えている。ここでは、ただ一人皆と別れてしまうという思いが、皆との来世での関わりを願う思い、さらに来世では、法を通して結ばれることによって、よりよき関係を実現したい、自己と他者がともに救われたいという祈りを支えている。その祈りは歌の形で表現され、相手へと伝えられる。法を贈り贈られることによって結ばれる縁の存在が、歌を贈り贈られることによって確認される。死を前にしてなお他者と共有しうるものを仏教は与えてくれるのである。紫の上は、法会という仏教儀礼の場が存在することによって、自らの思いをすくいとってもらったと言えよう。

「他者に苦を与える存在」として自己を捉え返し、他者を救いたいという慈悲の思いを抱くことによって、現世で抱える苦悩を引き受けていくことができるということを、物語は女君たちの生を通して語っている。仏教は、他者との関係を断ち切るものではなく、新しい関係をつくり出すものとして見いだされることになったのである。

おわりに

『源氏物語』は、真摯に自己という存在や他者という存在と向き合えば向き合うほど、出家という選択から離れていく、ということを描き出した。自分が抱える執着は、果たして本当に克服できるのかという問い、いいかえれば、自分に善が可能なのかという問いは、同時代でいえば、『往生要集』を執筆した源信ももっていた問いである。源信は『往生要集』において、自らを「予が如き頑魯の者」⁷と表現し、そうした自己がよりどころとすべきものとして、極楽往生に関する教えと行いをあげている。この世に存在するあれこれの物

事に心を動かしてしまう自分には、釈迦のように、この世で修行を積み重ねることは難しい。だからこそ、修行の環境が整っている極楽に往生することがめざされる。極楽では、直接仏の姿を仰ぎ見ながら、仏と成るべく努めることができる。自己について問うことが、新たな思想や実践を生み出していったのである。

一方『源氏物語』もまた、断ちがたい執着をいかに引き受けていくべきかを模索した。その結果見いだされたのが、他者の苦を思うことによって、自分が抱える苦をも引き受けることができる、ということであった。その結論は、他者を救うことをめざすという意味で、仏教がすすめる生き方と重なり合う部分をもっている。けれども物語において、朧月夜や紫の上は、仏の教えに従ったため慈悲の心をもつようになった、とは語られない。あくまでも彼女たちは、自らの経験の中から、他者に対するいつくしみの心を育てている。また、彼女たちは、慈悲の行いをなしたから極楽に往生できたと語られることもない。物語は、善因楽果の理にもとづいて、彼女たちの行いが解釈されることを、注意深く避けている。その結果浮かび上がるのは、仏教儀礼が今生において担う意味である。朧月夜は、回向という営みを通じて、光源氏を思い続けることができ、紫の上は、法華経千部を供養するという営みを通じて、今生の別れの悲しみをひきうけることができた。そうした営みが、確かな果をもたらすかは分からない。けれども、他者とのよりよき関わりを願うとき、仏教は、その願いに仏教儀礼という具体的な形を与えてくれるものとしてあらわれてくる。『往生要集』が、明文化されている仏教の論理の内部で、新たな実践の形を探そうとしたとすれば、『源氏物語』は、仏教の論理をいったん批判することによって、逆に、現に存在する儀礼の意味を新たに見いだすことができたと言えよう。物語が描こうとしたのは、この世において他者と関わり、悩みや苦しみを抱えつつも、よりよき関係をめざして一歩踏み

出していこうとする、その心持ちを支えるものとしての仏教であった。それは、光源氏と関わった女君たち一人ひとりの、生の軌跡に寄り添い続けた物語が最後に見いだした、一つの希望であったのだと思う。

注

- 『三宝絵』からの引用は、新日本古典文学大系に拠る。
- 『日本霊異記』からの引用は新編日本古典文学全集に拠る。
- 『源氏物語』からの引用は、新編日本古典文学全集に拠る。丸数字は巻数、アラビア数字はページ数を表す。
- 朧月夜の出家と女三の宮の出家については、拙稿「朧月夜の出家」（『駿河台大学論叢』第49号、2015年1月）「女三の宮の出家」（『季刊日本思想史』第80号、2012年11月）を参照願いたい。
- 以下の紫の上に関する考察を含め、本稿は、拙稿「思想はどれほど物語を作るのか」（助川幸逸郎ほか編『新時代への源氏学4 制作空間の〈紫式部〉』竹林舎、2017年）と重複するところがある。
- 『仏説出家功德経』（『大正新修大藏経』第16巻）に拠る。
- 石田瑞鷹訳注『往生要集（上）』岩波文庫、1992年、10頁。

参考文献

- 頼住光子『日本の仏教思想－原文で読む仏教入門－』北樹出版、2010年
- 大隅和雄編『大系仏教と日本人4 因果と輪廻』春秋社、1986年
- 三角洋一『源氏物語と天台浄土教』若草書房、1996年
- 速水侑『平安仏教と末法思想』吉川弘文館、2006年
- 佐藤勢紀子『宿世の思想』ペリかん社、1995年
- 佐藤勢紀子「『源氏物語』における罪と宿世－紫の上の罪意識を中心に－」『国際文化研究科論集』17、2009年12月
- 木村純二「『宿世』の思想」『哲学会誌』39号、2005年3月
- 木村純二「『恋』の思想史－『源氏物語』の到達点」『季刊日本思想史』第80号、2012年11月
- 武原弘『源氏物語の認識と求道』おうふう、1999年
- 斎藤暁子『源氏物語の仏教と人間』桜楓社、1989年
- 吉田幹生『日本古代恋愛文学史』笠間書院、2015年
- 松岡智之「死－紫の上の死を中心に」増田繁夫ほか編『源氏物語研究集成』第11巻、風間書房、2002年